

TENOHASI

てのはし

地球と隣のはっぴい空間池袋

会報誌第31号 2015年9月1日発行



8月13日 「マカロニ」での料理教室 (p11,14 参照)

2014年度活動報告&総会報告号

TENOHASIの理念	2	てのはしのひと	20
今年度も活動を継続できます!	3	ご寄付御礼	24
2014年度総会&活動報告	4	「漂流老人ホームレス社会」	26
ときわハウス活動報告	12	「妻が遺した一枚のレシピ」	27
生活応援スタッフって何してるの?	14		

The Earth and Neighbor Of Happy Space Ikebukuro

TENOHASIの理念

1. サポート

TENOHASI＝地球と隣のはっぴい空間池袋は、「ホームレス」を含めた生活に困った方が、孤立せずに信頼関係を生きていけることのサポートを使命とします。

「ホームレス」とは、その方がその時にホームレス状態にあるという意味で使います。ただし、「ホームレス」状態に至るまで、また「ホームレス」状態での社会の関係性の維持を大切にします。

1, サポートの仕方

緊急一時支援の他、関係性を大事に当事者とよく話し合い互いの理解の上で状況や希望に応じた、私たちのできる必要なサポートを丁寧に行います。

1, 安心の空間

社会的地位、経済状況、年齢、性別、健康状態などの条件に関わらず、人々が地域で安心して生活できる空間作りを目指します。

1, つながる

置かれた立場や状況、境遇など様々なちがいを当たり前のこととしてつながることを目指します。そのために現状を共有するための情報発信をしていきます。

1, 大切にしたいこと

ゆっくりなこと、非効率で無駄だと思えることを大切にします。

素朴なこと、個人の個性や特殊性ということ大切にします。

1, 池袋・地域

池袋という地域性を把握した上で、地域に根付いた、時と場に適った活動をこころがけます。

これは、結成間もないTENOHASI会報誌第2号(2004年発行)、に掲載された「TENOHASIの理念」です。

会報誌14号まではいつもこれを巻頭に掲載していたのですが、2009年以降は記事が増えたために割愛してしまいました。ですから、これを読んだことがあるメンバーは、今となってはごく少数派でしょう。

発表から11年。改めて、まずは初めて読んでみて、皆さんはどう感じられますか。

池袋の片隅で細々と炊き出しをしていた頃と、ネットワークが広がって専従職員も置けるようになった今とではずいぶん様変わりしましたが、TENOHASIは今もこの「理念」の延長上にあることが確認できます。

これからも、ゆっくりなこと、非効率なこと、素朴なことを大切に活動していきます。

巻頭報告… 皆さまのおかげで
今年度も活動を継続できます！

2014年度 TENOHASI会計報告		
*前年度との比較はホームページをご覧ください。		単位:円
前期繰越		12,674,363
収入	寄付金	6,636,553
	助成金	0
	合計	6,636,553
支出	炊き出し	797,332
	夜回り	0
	生活支援	2,806,913
	シェルター家賃	1,508,760
	シェルター光熱水通信費	491,854
	業務委託費	3,472,539
	事務費	782,373
	合計	9,859,771
単年度		-3,223,218
次期繰越		9,451,145

2014年度は、常勤職員の雇用・個室シエルトの実現など、やりたかったことが次々に実現した年となりました。

その前の年は助成金打ち切りによる財政危機でしたが、TE

NOHASI史上最高の寄付金とFIT for Charityの助成をうけ、1200万円を翌年度に繰越すという信じられない黒字決算となり「池袋の奇跡？」と感激しました。

その御礼を掲載した1年前の

会報誌で、2014年度予算を次のようにお知らせしました。

収入…	460万円
支出…	940万円
差引…	マイナス480万円

今年も皆さまに寄付をお願いして460万円は集め、しかしそれに倍する資金を活動に使って、繰越金は2年半で使い切ってしまうという計画です。その先は・・・まあ、どうにかなるでしょう。

繰越金が十分ある団体だと寄付してくださる側のモチベーションも上がらないだろうから、460万円も集まったらいいなあと思っただけなんです。

なんと、2014年度に頂いた寄付金総額は約664万円。予想より約200万円プラスという結果となりました。

奇跡の再来か！

支出は、約990万円。予算より約50万円アップとなりました。しかし、寄付金が予算を超えたので、赤字は約320万円で済みました。このペースが維持できたら、あと3年間は活動を継続できます。

2015年度予算
収入…766万円
支出…968万円
差引…マイナス202万円

今年度も、みなさまにお願いして寄付金を460万円は集めて、さらに今年度新たに庭野平和財団からの助成金300万円を頂くことができましたので、赤字額はさらに減るといふ予算を立てました。ただし、庭野平和財団からの助成金は専従職員の増員に使いますので、支出をこの範囲でおさめるのは正直難しいかなと感じています。

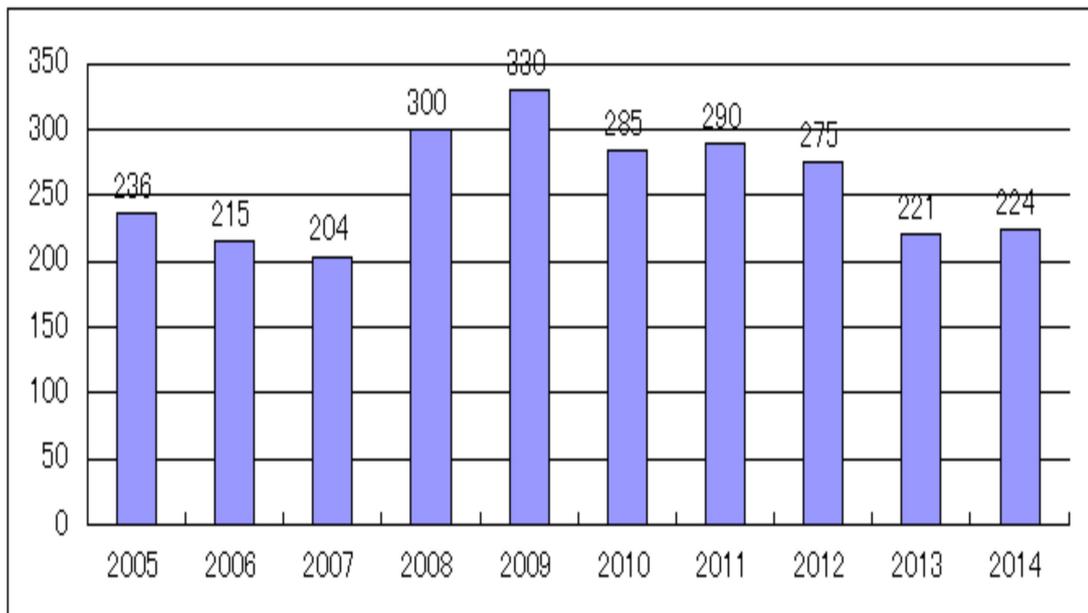
「TENOHASIはお金があるらしいから大丈夫」とか思わずに、今年もご支援よろしくお願ひします。

2014年度 TENOHASI

活動報告&総会報告

2014年6月2日に、特定非営利活動法人 TENOHASI の総会を行いました。
1年間の動きをご報告します。

炊き出しに並んだ人数の変化 年度ごとの平均



炊き出しに並ぶ人の数は微減。リーマンショック前に戻るにはあとすこし

1, 炊き出し

2014年も、調理場所を無償で提供して下さっている駒込大観音光源寺さんのご厚意により炊き出しが継続できたこと、みなさまのご協力により一度も欠かさず温かい食事が配れたことに感謝します。

*光源寺で料理を行っていることはネット上では非公開ですのでご注意ください。

炊き出しに並べられた方は一回平均二百二十四人。昨年度とほとんど変化がありませんでした。リーマンショック後の1年間は三百人越えが当たり前だった時期と比べればかなり減りましたが、それでもまだリーマンショック前の水準を上回っています。

リーマンショック前はほとんど見られなかった二十〜四十代の若い方がかなり見られることもかわりありません。

炊き出しのいらぬ社会はまだ先のようなです。

ボランティア & スタッフ問題

炊き出し1回あたりのボランティア数の平均は調理班25人・公園班31人。

医療班などを含めた総数は約74人(前年度75人)でした。

そのうち初めて参加された新人は約14人(前年度14人)です。

どれも前年度とほとんど変化なく、人数は安定しています。

その一方で、「新人は多いがリピーターが少ない」「新たに「スタッフ」となってくれる人がほとんどいない、または育たない」という問題を抱えています。

①炊き出し調理班

炊き出しの調理班では、「一部のコアスタッフからの指示の声がきつい・人によって指示が違う」ということが問題になりました。少ないコアスタッフが、何も知らない新人さんを指導しながら短時間に多くの作業をこなす必要があり、そのストレスから言葉が荒くなり、それがボランティアの定着を妨げるという悪循環に陥っていました。2月から何回か話し合っ、炊き出し調理の場を、お互いの交流と成長の場にして行くために、次の方針を決めました。

<調理班 2015年度方針>

1, コアスタッフのスキルアップ

・TENOHASIの理念を共有して、どの作業も交代可能で、何の目的で何をいつまでにどのように仕上げるのかを説明できるように、お互いにスキルアップを図る。

・参加者がどんな問題意識をもっているかを把握して、その人の問題意識に沿った、その人を成長させる話が出来たり、自分では出来ないときに出来る人につけることが出来るようになる。

・問題を感じたら抱え込んで1人で解決せず、他の人と相談して前向きに穏やかに解決する

2, コミュニケーション・作業量の軽減

・設営ができればミーティングを行い、誰がどの作業を担当するかの確認・新人の紹介・作業手順の確認を行う。

・作業量を減らす。汁は寸胴大3つに限定して野菜はそれに入るだけに制限する。

・作業の進行タイムテーブルを作る。野菜の切り方について、写真を利用してわかりやすいシンプルなものを作る。

②ボランティアお茶飲んで懇親会

11月の会議で「新規ボランティアの定着率の低さ」をどうしたらいいか話し合いました。その結果、炊き出し終了後、ボランティアを対象に「茶話会」を開いてみることを決定。越冬初日の12月29日に1回目をやり、4月からは第二土曜の炊き出し終了後の午後7時半くらい～9時くらいまで、近くの喫茶店で行っています。

参加者は、学生であったり社会人であったり、生活に余裕がある方だったりそうでなかったり。しかし誰にも路上の人への共感が基底にあるので、話していて面白いし、気持ちの良い時間となっています。また、団体参加よりも個人で来ている人のほうが、モチベーションが高いのか？茶話会まで残ってくれる傾向があります。今まで漠然と「毎回、たくさんの新人がきているのに、そのまま逃してもったいない」と思っていたのですが、もったいない人は限られていることがわかりました。ここでできるつながりを大事にして、ここを居場所にしてともに歩んでくれる人が増えるように努力していきたいと思えます。

TENOHASIは、継続的に関わってくれるボランティア・スタッフを常に求めています！

医療相談

医療班は、炊き出しと並行して、今年も医療相談会を実施しました。

相談者は各回25名から50名程度で、1年間の延べ相談者数は929人（2013年度は740人）・1回平均39人（同32人）でした。

相談を受ける医師は毎回2～4人で、だいたい内科と精神科の医師がそろうので、体と心の双方の相談を受けています。

医療につながるが必要と判断され、紹介状を発行した方は延べ19人で、この人数は2013年度と全く同じでした。

前年度と比べて相談者数は増えていますが、重篤な状態にある方はさほど多ありませんでした。健康について相談したり、悩みを聞いてもらって安心して帰るといった方もいらっしやいました。

重い病気や障がいを抱え、生命の危機に瀕しながら路上生活を余儀なくされている方というのは昔池袋にもたくさんいらっ

しやいました。その頃は体調が悪くても日々の生活に追われて放置し、悪化させてしまう方が多かったです。

しかし最近では重篤な方はかなり減りました。

医療相談で健康について相談して、必要があれば医療や生活保護につながるができるようになったので、病気になるっても悪化する前に治療する方が増えたこと、生活保護が以前よりは取りやすくなってきたことがその背景にあると思います。

しかしまだまだ適切な支援につながれず、失わなくてもいい命を落とされる方がいらっしやいます。これからどのような支援が必要なのか追究していきたいと思えます。



生活相談と生活応援活動

炊き出しの生活相談にいらした方、医療相談で路上脱出を勧められた方、水曜日の夜回りで相談を受けた方などの相談を受けて、路上脱出と安定した地域生活につながるまでを支援するのが生活応援活動です。

昨年4月から、はじめての常勤職員として精神保健福祉士の小川芳範さんを迎えました。生活支援とシェルターの運営の担当として活躍していただき、TENOHASIの支援力は飛躍的にアップしました。

昨年度、炊き出しの相談会にいらした方は毎回1〜10人、延べ126人（1回平均約4.8人）でした。相談の結果、生活保護や自立支援事業の利用を希望される方は、TENOHASIのシェルター（空きがないときはネットカフェなど）に泊まっていたいただき、週明けに役所に同行して申請します。宿泊していただいた方は延べ36人（1回平均約1.5人）でした。

相談したけれど「まだ自力で

がんばるから」という方や、「大部屋では神経がもたないから無理」ということで支援には至らない方もいらつしやいます。

「生活保護を辞退して仕事に就いたけど、やはりもたなかった」

「生活保護で無料低額宿泊所に入ったけれど、人間関係でトラブって出てしまった」という相談もよくあります。

路上を脱出したけれど、そこでうまくいかずに「再路上化」したケースで、心身に障がいがある方も多く、継続的な支援が必要になります。

雑魚寝から個室へ

「シェルター」に関しては昨年度大きな変化がありました。すでに前回の会報誌でもお伝えしましたが、6年にわたって運営した雑魚寝型の「ボトムアップシェルター」を引き払い、個室型の「ときわハウス（池袋）」と「つくろいハウス（中野）」を使えるようになったことです。

・4月から10月中旬までの6か月あまりにおけるボトムアップ

プシェルター利用者はおよそ20人ほどでした。

しかし、7月頃より南京虫の発生や、利用者間のいざこざが多発し、さらに支援員の居ない夜間や週末に元利用者が突然・無許可で来訪して利用者を不安にさせるなど、事実上の機能不全状態に陥っていました。

また、雑魚寝のストレスに耐えられず失踪する方も増え、雑魚寝スタイルのシェルターの役割は終わりに近づいていることがはつきりしてきました。

そんな時に、「ホームレス資料センター」が助成金をとったので、個室シェルターになる物件を探しているという話が偶然にも舞い込み、10月よりホームレス資料センターとTENOHASIが共同で運営する個室5室の新シェルター「ときわハウス」を始めました。

また、稲葉剛さんを中心とする「東京つくろいファンド」が中野区沼袋に個室9室の「つくろいハウス」を開設し、TENOHASIも使えるようになりました。これで、個室シェルターを使った支援体制が一気に拡

充しました。
*「ときわハウス」での支援については「ときわハウス活動報告」参照。

また、2015年度は、庭野平和財団の助成金を得て、二人目の常勤ソーシャルワーカーを雇用することができました。その活動については、14ページの戸口さんインタビューをご覧ください。

この拡充されたシェルターとマンパワーを利用して、一人でも多くの方が「ホームレス状態」から安定した地域生活を継続的に送れることができるよう、「東京プロジェクト」で連携する団体が協働して活動していきます。

また「クリニックを併設したソーシャルワーカーズオフィス」を作るプロジェクトが開始しました。次回、ご報告します。

鍼灸班 (TRUST)

石崎卓

(1) 公園での鍼灸治療

炊き出しのある第2・第4土曜日に、公園の一角を使って無料の鍼灸治療を行っています。

スタッフは受付が2〜3名、鍼灸師は3〜4名がほぼ毎回参加し治療時間は2時間（現在は3時間）。利用者は延べ188人、1回あたり平均は約9人でした。

利用者の主訴は腰痛・胃痛・肩の痛み・目の痛みなどさまざま。初診の方は2〜3割で、多くの方が再診です。

昨年度は新テントの破損で修理に費用が多かったり、受付や機材の運搬スタッフが足りない状況もありましたが、TENOHASIIに募集広報を出して頂いたこともあり、遅滞なく治療することができました。

(2) 東池袋四丁目はりきゅう院移転

鍼灸班の拠点となっているはりきゅう院は、主に経済的な理由から今年4月、移転しました。

スペースは半分以下となりましたが、部屋代も半額となり、

テント等の収納もなんとかでき、リヤカーの保管もできますので、新たな気持ちで再出発しました。

これで当面（1〜2年）経済的な問題から解放されました。

(3) 3・11見聞ツアー

第4弾を2014年8月2・3日に行いました。主な見学先は、福島市、南相馬市・相馬市・宮城県山元町などで、南相馬市の桜井市長と懇談したり、元校長である語り部さんの案内で山元町の小学校跡地を見学するなど、たくさんの方の交流活動を行いました。

放射線量が高い地域を除けば、がれきは片付けられ復興は進んでいるようにみえますが、安定した地域生活が再建されるのはまだまだこれからだということが実感できました。

それはちょうど、「ホームレス状態にあった人に屋根と食を与えさえすれば、働いて社会復帰できるはず」という考えは幻想であるのに似ています。

マッサージ班

加藤正毅、橋本邦恵、橋本善博

1, 継続して出来たこと

炊き出しの日のマッサージボランティア。1回あたり平均8人の方がマッサージを受けられました。

2, 新しくできたこと

今まで行ってきた通路奥のスペースが閉鎖になったので、場所を移しました。前は静かではあるけれど人目につかないところで、近寄りにくい雰囲気がありました。それがトイレ前の開けた場所になったので、マッサージを行っていることが前よりもアピール出来ました。皆さんからよく見える場所が変わってマッサージを希望される方が増え、多くの方の治療が可能になりました。

3, 感謝したいこと

利用者・来訪者そしてスタッフの何気ない言葉。皆さんとても優しく、色々、気を使ってくれるのがうれしいです。

利用者を連れてきてくれる炊き出しスタッフがいました。

4, 問題点

雨天時の対応。二人用くらいのテント（中に施術者が入って、利用者1人収容可能な）設置して行っただろうか？という提案あり。目立ちすぎるかとも思うが、試験的にやってみたいと思っています。

マッサージの場所が変わってから忘れ物が増えた様に思えます。待っている利用者の順番を間違えて失礼をしてしまうことがある。施術中、常に気を配るようになります。

5, これからやっていきたいこと…

みんなで体操。お一人にかける時間が長くなりすぎてしまい、順番を待っている方達にご迷惑をかけてしまっています。出来るだけ早く、リラックス&治療的マッサージを提供して行きたいです。BGM・アロマテラピーも。

心に残ったエピソード…
施術の後の、ありがたうの言葉と笑顔。気をつけて帰るんだよの暖かい気遣い

ほっと友の会

稲見麻里

感謝…昨年度も、皆様のおかげで1年間、無事にほっと友の会を継続できたことを感謝いたします。ほっと友の会の活動は、カトリック池袋医療班からのご寄付によつて成り立っています。この場をかりて、感謝申し上げます。

昨年度の成果

前回の6月の総会での話し合いを踏まえ、7月から、ほっと友の会に初めて参加するボランティアさんの受け入れ方を変えました。

①夜回りか炊き出しに最低1回は参加していることを、ほっと友の会の参加の条件に加えました。

②ほっと友の会に初めて参加するボランティアさんの事前受付メールを転送してもらい、参加者には、事前に、わたしのほうから、ほっと友の会に関して丁寧なメールを送るようにしました。

↓結果として、今のところ、とても良い効果が出ています。

参加者が心の準備をして、真面目な気持ちで参加してくれる

ようになりました。この方法に
してから、申し込まれたのは3
名で、うち2名が継続的に参加
してくれています(残りの1名
は遠方からの参加の方でした)。
・ほっと友の会の終了が午後6
時。炊き出しの配食開始も午後
6時ということから、ほっと友
の会に参加した人は、配食の列
に並ばなくても炊き出しがもら
えるように配慮いただいていま
す。

そのため、炊き出しを食べる
人の数を確定するため「きょう、
炊き出し食べる人」と、会の
途中で、ほっと友の会の参加者
に手をあげてもらっています。

「食べる人は、現役の路上の
人で、食べない人は今は路上で
ない人」というように、優劣が
ついても困るので(当事者間で
少しそういう雰囲気があった)、
スタッフも積極的に手をあげて
一緒に食べるようにしていまし
た。

そうしたら、今では、参加者
全員が食べるようになりました。
スタッフは、一緒に食べること
で、振り返りのスタッフミーテ
ィングの開始時間が遅れてしま
うのですが、

おじさん達と個別の話をしな

がら、一緒に食べる楽しさを優
先しています。おかげさまで、
いい時間になっています。

今年度の方針

おじさん達の人生に寄り添い
ながら、そこで語られることを
大切に、毎月、欠かすことなく、
ほっと友の会を開催し続けてい
きたいと思っております。



夜回り

1, おにぎり作り

毎週水曜日の夜回りで配布するおにぎり約150個を作っています。12月まではボトムアップシエルターで、ボトム引き払い後の1月からはマカロニ(世界の医療団・訪問看護センター Kazoc の共同事務所)をお借りしています。

作業には、有難いことに旧ボトムアップシエルター時のメンバーが引き続き参加して下さっています。

更に新たに“べてぶくろ”のスタッフおよび当事者の方々、そして戸口さんらも参加され、毎回賑わいのなかで作業を行っています。新しい方が「おにぎり作りから参加したい」と希望されることもよくあるのですが、狭いこともあり、継続的に夜回りに参加されている方に限定しています。

五目おにぎり不人気問題

おにぎりは五目のα米(お湯を入れれば食べられる保存食。消費期限が近くなつて寄付されたもの)で作っているのですが、今ひとつ人気がなく、中には食

べられずに捨てられることもあるといふ問題が浮上しました。

五目おにぎり以外に、あさやけペーカリーで作って下さる白米のおにぎり30個・手作りパン30袋も配布していますが、「五目と白飯どちらがいいですか」と聞くとだいたい8割の方が「白飯」と答えます。

五目米はもともと粘りけが少なくおにぎりに向かないことと「おにぎりは白飯!」という白飯ファンがおおいことが原因でしょう。

すべてのおにぎりを白飯にするのは設備と手間の問題で難しいので、五目おにぎりが皆さんに喜ばれるようにグレードアップさせる方向で検討しています。

五目おにぎり人気アップのアイデア募集中。

2, 夜回り

毎週水曜日の21時半から、池袋駅前公園で、おにぎりとチラシを並べられた方に配布しています。

昨年度、おにぎり配布に並べられた方は平均54人でした。昨年度より6人減少で、ピークだった2009年の131人と比べると半分以下に落ち着きました。

そのあと4コース(駅構内いけふくろうコース、駅構内有楽町コース、東口コース、西口コース)に分かれて夜回りをします。歩きながら出会った方におにぎりやパン・チラシを渡し、生活相談も受けつけます。

夜回りで出会った路上生活の方は1回あたり平均91人で、前年度より11人の減少。しかし2010年の126人と比べて減少率が低いのがあいかわらずの課題です。

ボランティア

多くの人にホームレス問題の現場を見てもらいたいという思

いから、夜回りのボランティアは「一回だけ・アポ無しOK」としていました。

しかし、「お手軽ボランティア」と思われたのか、また学校でボランティア体験が課題とされることが多くなったためか、特に学生さんが集団で参加することが多くなり、最高で20人を越えることができました。

これではビギナーが多すぎて収拾がつかないので、1月から「1週間前までにメールで申し込み」制に変えました。

ビギナーの参加はこれですっかり落ち着いて、毎回2〜4名程度となっています。

各コースのリーダーはほぼ固定していますが、それに次ぐ人が少ないので、気軽に休めない状況が続いています。特に西口コースは順路を知っている人が少なく、中止になったことがあります。

夜回りに継続的に参加して、リーダーを務めてくれる人を引き続き募集します。



東京プロジェクト

東京プロジェクトとは■

「東京プロジェクト（ホームレス状態の人々の精神と生活上プロジェクト）」も6年目になりました。

ホームレス状態にある方の中に障がいを抱えた方が非常に高い割合で存在することは、2008～2009年に行った調査活動で明らかになりました。

これらの方は社会のセーフティネットからこぼれ落ちて「ホームレス」と「障がい」の2重の困難を背負っています。

いままで、「ホームレスの支援策」「障がい者の支援策」はありましたが、「路上の障がい者の支援策」というものはこの国のどこにもなく、制度の谷間にすっぽりと落ちていました。

そこで、その支援方法を開発して政策提言しようと始まったのが「東京プロジェクト」です。現在の参加団体は、世界の医療団、TENOHASI、べてぶくろ（浦河べてるの家）、訪問看護ステーションKAZOC（かぞつく）の4団体です。

■大まかな分担

入り口支援Ⅱ炊き出し夜回り

…TENOHASI

医療相談Ⅱ夜回り炊き出しの医療相談とその後の健康相談

…世界の医療団+カトリック池袋医療班

生活相談Ⅱ公的支援につながる・つながった後の生活全般の支援

…TENOHASI・世界の医療団・べてぶくろが協働

緊急一時宿泊Ⅱシェルター

…TENOHASI（NPO法人ホームレス資料センターと協働で「ときわハウス」を運営）

日中活動Ⅱ料理教室などのデイケア活動

…世界の医療団と有志

グループホームⅡ精神障がいのある方の通過型グループホーム
…べてぶくろ（グループホームしずくを運営）

訪問看護Ⅱ精神障がいのある方の地域生活支援

…訪問看護センターKAZOC

■支援のマンパワー向上

昨年度は、TENOHASIに小川さん、KAZOCに山内さんという2人の精神保健福祉士がフルタイムで配属されて、支援力が大きく向上しました。

山内さんは3月に退職されましたが、今年、べてぶくろに木村さん・五十嵐さんという2人の精神保健福祉士が配属され、TENOHASIにも同じく精神保健福祉士の戸口さんが入職されたので、支援のマンパワーは着実に向上しています。

■アパート転宅問題

安定した地域生活の第一歩は、安心できる自分の住まいを確保することです。

しかし、シェルターや宿泊所からアパートに転宅するには、転宅費用を申請して福祉当局に認めてもらう必要があります（生活保護受給者の場合）、また「元ホームレス」「障がい」「生活保護」「高齢」などの属性が増えるほど入居可の物件が少なくなり、アパートに転宅する前にご本人が疲弊して失踪してしまうと言うことも起きます。

不動産屋と大家さんとのネットワークを作り、入居可能物件

を開拓すると共に、入居後に放置されず、地域とのつながりをもちながら生活する方法を模索していかなければなりません。

■日中活動

①パン作り

池袋あさやけベーカリーで、夜回りで配るパン・おにぎりづくりを行っています。

②ライブハウス・マカロニ

ヒーライトネット（江戸川区の精神障害者当事者グループ）のみなさんがうたごえ喫茶を開催しています。

③料理教室

家でも出来る簡単料理をみんなで作っています。表紙参照。

④当事者研究

べてぶくろの向谷地宣明さんや当事者メンバーにより開催されています。

④農業

千葉の畑に毎月通って農作業を楽しみます。

⑤リーディングアクト

絵本を読んで語り合います。他にもいろいろ。

日中活動の企画&ボランティアは常時募集中。

ときわハウス

活動報告

2014年10月に、NPO法人ホームレス資料センターと協働で設立した個室型のシェルター&ステップアップハウス「ときわハウス」。

5ヶ月の活動を、施設長の小川芳範さんから報告します。

●ときわハウス(以下、TH)とは
ゲストハウスの1階部分5室で、4室をシェルターとして、残り1室は夜間常駐の世話人の居室にあてています。
部屋はすべて洋室で約8〜12㎡ほど。ベッド、机、椅子、収納スペースを備えています。
共用部分にはキッチン、ダイニング、トイレ(2か所)、シャワー、洗面所があり、冷蔵庫、電子レンジ、テレビ、電話、掃除機、洗濯機なども利用者が自由に利用できるようになっていきます。



スタッフは、パーソナルサポート(ソーシャルワーカー)3名、アシスタントスタッフ2名の他、住み込みの世話人1名、傾聴ボランティア1名、ボランティア医師および看護師です。

●利用のきっかけ

10月から3月までの利用者は延べ21人で、満室状態が続いています。原則として男性専用ですが、高齢の女性も受け入れられました。

ときわハウスを利用するきっかけとなったのは

- ①炊き出しでの生活相談 9人、
- ②夜回りでの相談 4人
- ③その他 6人でした。

年末年始には渋谷新宿山谷などで活動する支援団体と連携して「ふとんで年越しプロジェクト」を行い、そこで出会った方にも利用していただきました

●利用日数

平均利用日数は26、6日。
9日以下が10人・10〜19日が6人で大部分を占めますが、30〜59日1人、60〜89日3人、150日を越える方が1人と長期滞在する方もいらっしゃいます。

●利用者の年齢構成

利用者の平均年齢は52、0歳。「平成24年度ホームレスの実態に関する全国調査」では平均年齢59・3歳です。若年若い方が多いことがわかります。

年代別では

34歳以下 1人
35〜49歳 5人
50〜64歳 7人
65歳以上 5人
年齢不詳 1人でした。

●利用者の障がいの状況

利用者の障がいの有無については、きわめて顕著な数字が出ています。

①身体、知的、精神のいずれかの福祉手帳を保持していた方 3人

②ときわハウス利用後に、精神障がいの診断を受けた方 2人
③手帳は持っていないが、過去に精神科病院への長期入院歴がある方 1人

④身体的疾病のため入院された方 1人

⑤診断を受けていないが身体的な障がいにより就労がきわめて難しいと思われる方 3人

利用者21人のほぼ半分にあ

たる合計10人に、何らかの障
がいまたはその疑いが見られま
した。

● 公的支援の利用歴

11人の方が、過去に生活保
護、住宅支援給付事業、ホーム
レス自立支援センターなど、な
んらかの公的福祉サービスの利
用した経歴がありました。この
数字は障がいのある方とほぼ一
致し、既存の公的支援ではそれ
らの方に対応できてないことが
わかります。

● ときわハウスのか5か月から見 えてくるもの

ときわハウスを利用して、生
活保護や自立支援・就労につな
がった方は17人中11人、ス
テップアップ率は65%で、と
きわハウスでの支援が実効的に
機能していることを示していま
す。現利用者のうち2人はす
ずに行き先が決まっていること
を含めれば、この数字は68%
まで上がります。パーソナルサ
ポート付きの個室型施設が生活
困窮者支援においていかに有効
であるかを如実に物語っている
と言えるでしょう。

ときわハウス利用者の半数以

上は深刻な生きづらさを抱えて
いるにもかかわらず、適切な形
で公的サービスとつながれてい
ない状態にありました。医療や
福祉を必要としながら、公的支
援の網の目からこぼれ落ちる人
たちが存在することがここでも
はっきりしました。

生活保護などの公的サービス
へと「卒業」していったTH利
用者の中には、過去に複数回の
生活保護利用歴を持つ人たちも
少なくありません。こうした生
きづらさを抱える人たちにとつ
て、現行のシステムは機能して
いない、あるいは、現行システ
ムには、彼らが安心して生活(生
活再建)できる「場所」が存在
しないということ意味するでし
ょう。公的サービスとつながる
こと＝脱路上生活生活であると
はかぎらないのです。

● 今後の課題と抱負

実際、ときわハウスから生活
保護で無料低額宿泊所に移って
いった後に連絡が取れなくなっ
てしまった、あるいは、失踪し
てしまったという人が少なくと
も2人います。この数字をTH
からの失踪者および退所後先行
不明の利用者の数に加えると合

計8人となり、ステップアップ
率は53%(17人中9人)へ
と下がることとなります。「9
人」というこの数字は「パーソ
ナルサポート継続中の人数」と
一致します。ステップアップを
果たすには、部屋と食事を保障
するだけでは不足で、パーソナ
ルで継続的な支援が重要である
ことを示しています。

となれば、THを利用してス
テップアップを実現する人をさ
らに増やすには、パーソナルサ
ポーターの絶対数を増やすことが
重要です。

次の段階では、支援の担い手
が、パーソナルサポーターから、
地域の社会資源、さらには地域
それ自体へと広がっていくこと
が必要です。

これは(発達)心理学的な観
点から見れば、愛着(アタッチ
メント)の対象が個々のパーソ
ナルサポーターから、ときわハ
ウス全体へ、そしてさらには、
地域全体へと広がっていくとい
う事態に対応するでしょう。

こうした心理学的な側面も念
頭に置きつつ、利用者と共に地
域の社会資源を開発して活用す
ること、そして地域を組織化し
ていくことが安定した地域生活

の実現に通じるはずで。これ
からも、地域の関連機関との連
携強化およびネットワーク作り
を進めていかななくてはいけませ
ん。そのときに、TH利用者は
ときわハウスと共に地域社会資
源へと転ずるはずで。



TENOHASI 新スタッフ 戸口真良さんにインタビュー

生活応援スタッフって何してるの??

今年度、TENOHASIは庭野平和財団からの助成金を受けて、生活応援班スタッフ＝生活支援員としてPSW（精神保健福祉士）の戸口真良さんを職員に迎えました。戸口さんには、中野の「つくろいハウス」に入られた方の支援を中心に、相談／同行／日中活動など多岐にわたる仕事を願っています・・・とは言っても具体的には毎日何をしているのでしょうか？聞いてみました。



路上生活だった方の生活支援といっても、現場にいない人は想像もつきません。どんな活動をしているんですか。

「ホームレス」状態だった方で、夜回りや炊き出しで出会って結びついた方たちと、これらのことを一緒に考えて、その方の理想や夢を実現する支援をしています。

経済的な不安を解消するのはもちろんのこと、生活保護や年金制度を活用しますが、それだけでは安定した地域での暮らしは実現できないんですね。私

が支援しているのは精神障がいや知的障がいのある方が中心なので、安心できる居場所があって仲間がいることが大事なんです。ですから、地域の社会資源・・・マカロニでやっているような日中活動や、地域活動センターとか・・・で活用できるものを探して、一緒に見学に行ったりします。

受診同行に行くことも多いです。本人が困っていることを医師にうまく説明できないことが多いので一緒に話したり、医師から言われたことを支援者に伝えたり。

若い人だと、就労でつまずいたところは何だろうと一緒に考えて、面接の練習をしたりとか。

シェルターを卒業した方の相談も受けます。順調にいつるか、何に困っているのかとかを聞いて、安定した生活ができるように支援します。もう大丈夫だよ、といわれるまで関わっていききたいですね。

生活保護申請で役所に行くことが多いのかと思っていました。

生活保護の申請同行は週1回あるかないかですね。

申請よりも、生活保護受給後のことを役所に相談しに行くことが多いです。デイケアに通う交通費を支給してもらえないか、金銭管理について協力が得られないか、禁煙外来に通いたいと希望しているけど認められるか、精神科に通院できるか・・・などです。内科や外科と比べると精神科通院はハードルが高いんです。

毎週決まっているスケジュールは？

月曜日の午前は「つくろいハウス」のミーティングに参加します。

利用者・TENOHASIから入った方だけでなく、「もやい」とか「新宿ごはんプラス」などから来た方・・・にも、支援員がペアで面談して、どういう支援ができるかを一緒に考えて、希望する生活を実現するための手続きなどのお手伝いをします。

あと、マカロニの日中プログラムに週2回入っています。木曜日は料理教室。狭いマカロニですけど参加者が20人を超えていることもあって「家族みたい」

って言われます。メニューは「お手軽でお金もかからない簡単料理」の中からみんなで話し合ってきためます。買い出しして、みんなで作業を分担して。包丁が難しい人はカニカマを裂いても良かったり、卵を割るとか。食を介してみんながお話しできる居場所になっていると思います。

みんな料理を勉強に来ているんですか？

うーん、もちろん、「自炊ができるようになる」という目的もあるんですが、ここでやった料理を家でも作ったという話は聞かないですね(笑)。

みんなで役割を分担することや、作業が遅い人を手伝ったり自分も手伝ってもらったりする関係だとか、そういうことが大事なのかなと思います。何よりも、みんなと一緒に居て私が楽しいのがいいです。午前中は役所の手続きとかで疲れてても、ここでみんなの気さくな会話を聞いていると、文句も言いながら笑えてたりして、私自身がりフレッツシユしています。

もう1回は、私の地元の「伊勢型紙」を切って、しおりとか

作っています。切り絵は難しいからみんながみんなできるわけではないんですが、その人なりに無心になって取り組んでくれるのでそういう時間もいいかなと。家に一人で居ても楽しめる趣味を提案をしていきたいんですね。そうそう、「べてぶくろ」さんが、本と一緒にしおりも売ろうと言ってくれたので、「小銭かせごうプロジェクト」にして本人たちが意欲を持って作れたらいいなと思っています。

それと、「コラージュ」も作っています。雑誌や旅行会社のパンフとか集めて、好きな写真を切り抜いて画用紙に貼り付けるんです。けっこうみんな集中して、何枚も作られるんですよ。日頃積極的に参加しない人がいろいろな作品を作られて、しかも「これはこんなイメージで作りましたって」って話してくたりするんです。みんなコラージュに込めた思いがあるんです。話すのがとても苦手なAさんは高級料理のフルコースの写真の写真をずらりと並べていたのので、「これはどうして」って聞いたたら、「いつかまとまったお金ができれば高級なレストランに行きたいです」って。こんな

思いがあつたんだってわかってとても興味深かったです。絵にすると言葉では伝えられなかったものを伝えられて、私もその人を知ることができてありがたしいし、本人も自分自身を知るという意味で役立っているのかなと思います。

旅行好きのBさんは旅行のパンフばかりですね。「旅行に行きたい。泊まりに行きたい。温泉旅行に行きたい！」って(笑)。Cさんは画用紙からはみ出すほどの勢いで、まとまっていけないけれどご自分のいろいろな欲望や理想を表現しています。たとえばドイツニーランドのかわいいキャラクターの横には浴衣の女性がいて「私もこんなを着て出かけたいの...」。でも体重計があつたり食べ物があつたり。面白いなって。そういうことをみんなで語り合える空間つてすごく大事だなと思います。

あと、ときわハウスにも、時間が空いたらできるだけ顔を出すようにしています。皆さんがどんな生活をしているか知りたいたので。マカロニに来て下さる方も多いです。

その他の時間は何をしてるんですか。

決まっています。

その時々で相談を受けたり、頼まれたりして、「いついつならOK」っていうかんじで、どんな埋まっています。今週は・・・

月曜日の午後は中野区で生活保護の申請同行です。

火曜日は病院の受診同行です。その方は知的障がいがあるのでお医者さんに症状をうまく伝えられないので仲立ちをします。住民票移動があるので区役所にも。それで時間があまったらマカロニに寄って、みんなとお話しできたらいいですね。

水曜日は、別の知的障がいの方の者の障がい手帳の申請同行です。夕方は支援員のミーティング、夜はTENOHASIの夜回りに参加して池袋駅で寝ている方のところを回って声をかけます。

木曜日を受診同行です。この方は精神疾患のある方で、しっかりとしてみえるけどがんばりすぎて倒れちゃうタイプなんです。日常生活を送る上でいろいろな不安があるんですが医師にうまく伝えられなかったので、一緒

に行ってお話することになりました。午後はマカロニで料理教室です。

金曜日 マカロニでプログラムをやって、支援員のミーティング。あとはいまのところ空いています。

土曜日 今度の土曜は炊き出しなので、夕方から生活相談ブースで相談を受けます。

忙しいですね。日曜はちゃんと休めていますか。

日曜はだいたい休めます。ただし、当事者が家族と面会するとき、家族の方から「日曜しか休めないの」と言われことがけっこうあるので、その時は日曜でも出勤して面会に立ち会います。家族との関わりは大事ですが、今までいろいろあって関係が切れている方が多いんです。そのとき、「家族と連絡して話し合ってください」だと結局連絡もせずに終わることが多いので、「私が会いたいから連絡してね」とお願いして会ってもらうこともあります。

戸口さんが直接支援している方は常時何人くらいで、年代はど



のくらいの方ですか。

人数は5人から10人くらいですね。今一番若い方は20代で、上は80代です。

みなさんどういふところに困難を抱えているんでしょうか。

うーん、いろいろなケースがありますが・・・Dさんは炊き出しの生活相談で出会いました。中学校は特殊学級だったそうですが、生活するスキルは高いんです。でも、バランスが悪いんですね。衝動的で怒りんぼ。ちよつとしたことでケンカして飛び出しちゃったり、オネエチャ

ンのいるお店にはまったら家具を売り飛ばしてまで通ったりして、生活そのものを破壊させてしまったそうです。自分の気持ちを表現するのが苦手なのかな。マカロニのようにそういう人も理解して認められる場所ができれば、彼の良さが出てきて生活しやすくなるのかなと思います。マカロニに来た頃はすぐケンカして飛び出しちゃうんじゃないかって思われていたんですが、いまはマカロニ一番の働き者です。自分を守る必要がなくなれば、他人を攻撃する必要もなくなるんですね。

若いEさんの場合は、福祉の仕事に就きたいから職業訓練のセミナーを受けたい、と具体的な目標を語ってくれたので、私たちはその目標に近づけるように応援していたんですが、次に会ったときは「ITの仕事に就きたい」って目標が変わって「あれ、どうしたの」って聞いたら「いや、実習が・・・」。自分の希望する実習に行けなかったら、セミナーも途中で投げ出しちゃったんです。その時に、ITなら行きたい実習に行けるよという噂を聞いて相談もしな

いままにそっちに変えちゃったんですね。それが確かな話かどうかともわからないのに。いまはゲームソフトの制作会社に入ってます。ゲームを作りたいとおっしゃいます。経験もスキルもないんですが。

もちろん夢を持つことは大事なんです。この方の場合、現実的なところから出発して実現可能な目標に向かって進んでいくというのが難しいんです。

なぜでしょうか？

経験不足かなと思っています。その背景にはその方の生きづらさがあつたんでしょう。

ご自分のペースで緩やかに成長して少しずつ目標に向かって行ければいいんですが、他の人と同じスピードじゃないから「やっぱり自分ではできないんだ」って思いつて、誰にも相談せずに一人で判断して・・・逃げて・・・別の道を選んでしまうというパターンを繰り返してきたようですよ。

だから、「相談してくれるのを待っているよ」って伝え続けて、困ったときは私たちが他の人たちに相談して、柔軟に考え

られるようになってほしいと思います。そして、歩みはゆっくりでも振り返ったら「これだけ成長できた」って思えるようになってたらいいなって。それと、当事者同士、同じ体験をした者同士で学べることも多いので、そういうことができる空間と時間も大事だと思います。

Fさんは、生活保護でアパート生活をされていたんですが、契約更新のときに更新料が支給されたのによくわからないままに使っちゃって、あとで気がついて「やばい」ってアパートから逃げちゃったんです。どうして使っちゃったの、って聞いたら「ボーナスかと思ったから」って(笑)。この方は2年間ドヤ生活をして、やっとアパートに入ったんです。それで2年間アパートで生活できたのに、だめになっちゃった。この方も、「やばい」と思ったら逃げる」という傾向にあります。どう解決していいかわからないでしょうね。頼れる人も相談できる人もないなみたいだし。逃げたあとに生活保護のケースワーカーに電話したら「生活保護は廃止にします。でもあなたの場合それはお

勧めしないから戻ってきたら」といわれたそうですが、戻らずに路上生活に逆戻りして、そこからシェルターに入られました。この方の場合、次に困ったら相談してもらって変えて行ければいいと思います。

池袋に来る前に想像していたのと現実のギャップはありましたか。

ホームレス状態になった原因に精神疾患や知的障がいがあると聞いてきたので、私がかできないのかなと思ってたんですが、意外とできないことに気がつきました。

そうですか。すごくたくさんのご苦労をやって下さっていると思います。

病院は助けて欲しいと言って求めてくる人たちに、診断名をつけて治療と援助をするのが仕事です。

でも、ここでは、自分には病気も障がいがないと思っていない人たちが対象です。その人たちに、こういうことで困っているよね、それは自分が悪いんじゃない

なくて今まで解決の手段を見つけれなかっただけだね、って言うことに気づいてもらえないと思うのですが、障がい手帳を取らないと福祉サービスの提供もないのが現実です。

でも、自分が「障がい者」とされることに抵抗がある？

「障がい」と言う言葉は使いません。

「今ままでうまくいかなかった経験というのは、あなたが失敗したんじゃないかと他の手段を見つけないとダメなところもあるよね。他の人だったら他の手段も考えて選ぶけど、あなたはこれしかないと思ってしまふところがあって、そういう部分で生活しづらくしてしまっているよね。それはあなたの特徴で、みんながそれを理解してくれたら無理しなくても他の人の援助を自然に得られたり、自分が自分のままでいいと感ぜられるかもしれないから、一度先生に相談してみますか」って話します。

どういう点が自分の苦勞の素になつていくか気づくために受診を勧めて、先生が「検査してみ

ますか」と提案したら、そのときに手帳を取るかどうか選択してもらったらいと思つていません。

手帳は生きていく上でさほど必要なものではないけれど、必要なサービスが受けられたり、犯罪に巻き込まれそうになつたときに自分を守る手段になります。「うまくできないのは障がいがあるからだよ」とわかれば周りの目も変わりますから。

前はどんな仕事をされていたんですか。

精神保健福祉士として、三重県の精神科病院に勤めていました。私は、精神疾患は通院と薬だけでは治らなくて、地域の生活次第で良くも悪くもなると思っています。だから、病院の職員だけでなく訪問看護という形で地域に出て、本人の家での状態を見て、そこでの生活を工夫して安定した生活ができるようにしていくことが好きでした。自分の病院の患者さんが対象ですけど、違う病院に通うようになった人でも「ついでに寄りました」とか言つて訪問しちやったりして。そうやって生活を工夫してい

と言うことを医師に伝えたり。いろいろな立場の人が地域にいることが大事だと思います。そして、地域の人たちがその方をうまく見てくれるようになって「もう大丈夫だよ」と言われた時が、私が手を引くときだと思ってやってきました。

地域の人が恐がるのは、その人がどんな人でなにするかわからないからですよね。医療とつながっていると行ってはどういう医療につながっているわからなし。そこをちゃんと仲介してくれて要望を聞いてくれる人がいたら安心できますよね。

地域が安心して支援しやすい体制を作る必要があると思います。病院から「地域に返すからあとはお願いな」と言われても「困る」って反発されるしだろうし、本人の不利益にもなる。安心して「じゃあ一緒にやろう」っていう仲間になれるようにしたい。

その点では病院にいたときと今でやっていることはあまり変わりがない？

そうですね。本人が地域のコミ

ュニティにつながって、「この生活がいい」と言うまで、回数は減つてもつながっていたい。

「『ホームレス』支援というのは、路上生活状態にあった方が安心できる居場所を得て安定した地域生活を営めるようになることがゴールで、飯と屋根だけあればいいってもんじゃない」というのはTENOHASIがずっと言ってきたことでもありますね。では、精神科病院と違って戸惑うことは？

支援を拒まれること。思いがずれること。



一人で路上にいて高齢でやせ細っている女性がいて、安全なところに移った方がいいだろうとこちらは思うけど、本人は「助けてくれるな、ほっといてくれるのがいいのよ」とおっしゃって、支援を拒まれる。本心は違うのかも知れないけど、次の言葉をどうかけていいのかわからなくなっちゃう。生まれたときは家があっただろうし、そういう生活は体験してただから、家があればそこで暮らせるのかもしれないけど、そこまでの話し合いもできずに拒まれる。どうしよう。そこが一番悩みですかね

どうします？

どうしようかな。しつこく通って、顔見知りになって、一緒にジュース飲んだりご飯を食べたりして、ぽつりぽつり話せるようになったら、信頼してもらえるのかな。

必要最低限の支援でありたいとも思うんです。お節介すぎるのはやりたくない。顔見知りになって、ゆっくりじゅっくり遠巻きに見ながら待つって、本人が求めるまで何もしないというのの一

つの支援だと思えます。

では、これからやりたいことは？

何か制度を作りたい。足りない制度を。高齢・精神疾患・知的障がいとかの枠を越えて、困っている人がだれでも同じく必要なサービスを受けられるようにすること。そういう制度を作りたい。そのためには行政に認めてもらえるだけの実績を作りたいです。

TENOHASIも地域とお互いに協力しながら、地域の資源の一つになれたらいいと思います。今は路上生活の方の支援に特化しているから「地域と一緒に」というイメージがつかないんですけど、いずれは地域に活用される団体になれば。

クリニックができて、地域の人たちにも使ってもらえるようになる、そうなるかもしれないですね。戸口さんが来てくれて、「ENOHASIと東京プロジェクトの支援力は飛躍的に向上しつつあります。燃え尽きないように意識して休みを取るように気をつけながら、これからもよろしくお願ひします。」

てのはしのひと

その2

生活応援班 小川芳範

《サノさん》

鈍色の空から今にも白いものが落ちてきそうな師走の朝、両手に一つずつ紙袋をぶら下げ、足を引きずりながら、その人は約束の場所に現れた。前日の夜回り時、地下通路で具合悪そうにしているのを見かねたスタッフが保護を申し出たところ、翌朝会いたいと答えたとのことだった。

「サノと申します。よろしくお願ひします」
肩まで伸びた白髪。山羊のような白いあごひげ。かぎ鼻と目元の皺のせいで、ひよつとすると、魔法使いのおばあさんに見えるかもしれないが、そんな風貌からは想像できないような、太くしっかりとした声だった。同行のスタッフと前を行く後ろ姿に目をやると、小柄でやせ細った体軀に怒り肩の背中は意外に広い。

「コーヒーは久しぶりだなあ。ありがたいですねえ」

震える両手でクリームと砂糖をようやくカップに注ぎ込み、香りもろとも口に含むと、サノさんは顔を上げて、覚悟はできている、そう言わんばかりに私たちの方に向き直った。小さいながらも工務店を経営していた。

得意先の借金の連帯保証人を押し付けられた上に不渡りを出され、事業も財産も家族も、何もかも失った。その後はかつての取引先などの伝手を頼って、内装や建築関係の仕事をしていたが、重症の外反母趾、さらには貧血に苦しめられるようになり働けなくなった。やがて行き場を失い、野宿していた公園から救急搬送されて入院。目を覚ますと、がんの診断が待っていた。福祉とつながって、退院後も抗がん治療を受けていたが、遠方の宿泊所からの通院が続かず、再び野宿生活が始まり、駅構内で寝るようになった。ときに記憶に混乱があるものの、それが話のあらましだった。

「わたしのような人間のために、ご面倒おかけして。本当に申し訳ございません」

トリスバーのサラリーマンと三



度笠の渡世人。彼の言葉遣いは、まるで高度成長期の頃の日本映画のようだった。人が生きてきた時代特有の言葉。時間軸上の方言。そんなことを思った。マクドナルドを出ると雨が降り始めていた。私たちはタクシーを拾い、サノさんをシェルターへと案内した。

戦中に東京下町で生まれ、戦後、大工の親方だった父親や家族とともに荒川の河原が広がる土地へと移り住んだ。中学一年のときに柔道を始め、都電を乗り継いでせつせと講道館に通った。柔道の腕を買われて、地元私立高校に進学。卒業後も家業を手伝いながら柔道を続けた。

柔道は二段まで昇段したが、二十歳のときに家を出て、都内の洋品店で住み込み店員として働いた。四年が過ぎる頃、店主から婿に入って店を継いでくれなしかと申し出があった。仕事は好きだったが、結婚には気乗りがせず、店を去った。室内装飾の会社に職を得て、アパートを借りた。専務に可愛がられて居心地のよい職場だった。数年間働いたところで、独立を決意し、当時暮らしていたアパートで内装請負の会社を始めた。商売は順調に進み、地元近くの街道沿いの雑居ビルに事務所を構えるまでになった。結婚し、子どもも二人生まれた。幸せだった。

インスタントコーヒー、粉末クリーム、砂糖をそれぞれスプーンに二杯ずつ。シェルターに入居したサノさんは、濃厚なミルクコーヒーを作っては、マグカップで続けざまに何杯も飲み干した。二人前の食事を平らげた上に、フードバンクから届いたカレーパンやドーナッツをおやつに食した。最初に出会った時から気にはなっていたが、ズボンの汚れと臭いが、食欲と比例するように強くなり、サノさ

んの座る椅子には染みができた。慢性的な軟便に常時苦しめられているようで、成人用の紙おむつを渡したが、うまく着用できないのか、効果はほとんどなかった。体を拭いたトイレトーパーを大量に水洗トイレに流し、配管を詰まらせた。サノさんは日中のほとんどを薄暗い部屋に鍵をかけて、閉じこもって過ごすようになった。師走の雨は、いつしか雪に変わっていた。

シェルター入居から一週間になろうという朝、サノさんが玄関から出てくるところに出くわした。手には小さな紙袋が一つ。「こんな日に？」と問いかけた私に、きょうはどうしても新宿の友達のところを訪ねてみたいからと言って、サノさんはサンダル履きの足を引きずりながら、まだ雪の残る道を出かけていった。そして、そのまま戻ってこなかった。静まりかえった早朝のシェルター。私は合鍵を使ってサノさんの部屋の鍵を開けた。変わり果てた室内の様子を確認し、そっとドアを閉めた。一面に汚物がこすりつけられた

壁とカーテン。ペンキ缶をぶちまけられたような床とベッド。大きく深呼吸をした。ただの汚れであってほしい。もしもこれが内面の表出だとしたら。怒り？恨み？それがなんであれ、そんな気持ちを抱えて人が生きているのであってはならない。できることなら、もう一度サノさんに会いたい。そう念じた。

再会の時は意外に早く訪れた。クリスマスイブの池袋駅の夜回り。いつもの場所に段ボールが敷いて横になるサノさんの姿があった。地下通路から外の風が吹き込む、他の誰も見向きもしない底冷えする一角。それがサノさんの場所だった。私たちに気づくと、くるまっていた毛布から出て、段ボールの上に正座して頭を下げた。駅地下での束の間の睡眠のこと、始発電車前には段ボールを片付けて、二四時間営業のコインランドリーに身を潜めて暖をとることなど、日々の暮らしぶりを、客を迎えた主人のように上機嫌で話してくれた。シェルター滞在、失踪については何も語られなかった。私たちもそれについては黙し、ただ再会を喜び合った。同行の

医師から認知症の見立てがあった。

晦日までに駅近くのビジネスホテルに部屋が見つかり、サノさんはそこで年を越すことになった。私は食事とコーヒーを口実にサノさんを近所のコンビニやカフェに連れ出し、その間にボランティアの看護師さんたちが部屋の掃除を引き受けてくれた。

「こうしている間に、あの人たちはあんな汚いものを片づけてくれている」
何日目の外出の際、サノさんが唐突にそう言った。暖かい部屋で寝て、病院できちんと治療も受けた。体を治して皆さんの役に立ちたい。年が改まり、サノさんは隅田川に程近い、心優しい人たちが運営する宿泊所に入所することが決まった。

「子どもの頃、友だちの母親が屋台で焼き鳥を売ってましてね。あの頃はまだスズメを霞網で捕って食ったりしてましたが、あるとき友だちのところへ遊びに行ったら、裏庭にスズメが籠に入れられて置いてあったんですよ。かわいそうに思いましたね。」

扉を開けて逃がしてやりました」「練習試合なんかあるとね、女の子たちが大勢見物にくるんですよ。ときどき外国人との試合もあって、そんなときに勝ったりすると、きやあきやあ、それはもう大変だったです。大学のスカウトも来てました。東京オリンピックですか？そうですね。自分なんかも目指してました。でも、腕を折っちゃって。それで辞めました」

宿泊所の玄関脇の喫煙所でおかばを燻らすサノさんといろんな話をした。サノさんの紙袋にはいつも何冊か文庫本が入っていたので、本とタバコを手みやげに訪問することが多かったが、池波正太郎の時代小説がとくに好きだと知り、仕事の移動中などに暇を見ては、古書店に入って『鬼兵犯科帳』を一冊二冊と買い貯め、少しずつ届けた。こ





ここに終の住処を見出してくれませうように。私の側のそんな思いが込められていたのかもしれない。場所に馴染んでほしくて、二人で近所を歩いたりもしました。日当たりのよい道辻に、いつのまにか白梅が綻び始めていた。

治療を中断していた前立腺がんが骨盤へと転移している恐れがある。主治医からそう告げられたサノさんは、医師が勧める外科療法を退けてホルモン療法を選び、治療開始を待っていた。ところが、そのサノさんが散歩に出かけたまま戻らないとの連絡が隅田川の宿泊所から入った。もしやと思い、池袋の駅前広場

へ行ってみると、花壇の前のベンチに腰掛けているサノさんの姿が目に入った。

「池袋へもどってきました。やっぱり落ち着きますねえ」

何食わぬ顔で、サノさんはそう言った。都営バスを使って池袋に辿り着いたら良かった。

「シエルターに行きますか？」
小一時間ほど話した後、思い切ったそう尋ねると、あっさり同意した。

「いいところですねえ」

同じ場所にほんの数か月前に滞在したことは覚えていないようだった。そしてまたしても入居から一週間後にサノさんの姿が見えなくなった。残された部屋

の汚れも同じだった。

この二度目のシエルター失踪後、サノさんはやはり駅地下のいつもの場所に戻って行った。老人ホーム滞在中に開始された生活保護は失踪廃止となり、医療とのつながりは切れたまま、時間だけが過ぎていた。すでに二人の医師から認知症の診断があり、それがサノさんの一連の行動の原因だと考えるのが理に適ってはいた。しかし、私はサノさんが自分自身と、自分自身

の有有限さと向き合う機会をもつてほしかった。サノさんにはそれができると信じた。人通りのまばらとなった夜の駅地下に通って、もう一度生活保護利用の申請をし、治療を受けることをサノさんにうったえた。屋外から吹き込む風はまだ身を切るように冷たかった。これ一度きり。私は同行のスタッフの目を盗んで、差し入れのおにぎりの入ったレジ袋にカップ酒を一本忍ばせた。

再び福祉とつながり、かつてがん治療を受けた大きな病院に再入院することができて、サノさんは満足そうだった。しかし、一週間もすると、「池袋へ帰る」と病棟の看護師に詰め寄った。医師の勧める手術を再び拒否し、ホルモン療法を受けることが決まったが、通院で可能なその治療を入院中の患者が受けることはできないと言われ、退院か転院を求められた。病院ソーシャルワーカーの努力にもかかわらず退院先は見つからなかった。私にできることと言っては、相変わらず『鬼平犯科帳』と缶コーヒーを携えて病床を見舞うだけだった。でも、サノさんはも

うほとんど本を読んでいる様子になかった。とうとう、いつもかならずエレベーターのドアが閉まってこちらの姿が見えなくなるまで頭を下げ続けるサノさんが、礼だけ述べて、ドアが閉まる前に踵を返してゆっくりと病室のほうへ戻っていった。そのときのサノさんの奇妙に無表情な顔つきが頭から離れなかったが、他の仕事に追われて訪問ができず、私は焦った。そして、それから十日後、ようやく仕事帰りに見舞いに訪れた病棟で、前回の訪問のほんの三日後にサノさんが転院したことを知らされた。

その翌日、転院先とされる病院へ連絡してみると、一週間前の転院の日の晩にサノさんが死亡したことを告げられ、葬儀社に電話するよう言われた。狐につままれていような気がした。池袋から荒川土手近くにある斎場へ向かう途中、サノさんからその名前をしばしば聞かされていた彼の町をバスは通り過ぎた。目的地に到着し、土手下の車道を斎場へと急いだ。葉桜の並木を見上げながら額の汗を拭いた。貸倉庫のような霊安室に通され、

遺体と対面して、霊前で線香をあげても、それがサノさんの亡骸であるとは私にはまるで信じられなかった。斎場からほど近い住宅街にある、小さな病院に足を向けた。受付で三十分ほど待たされた後、個人情報だから何も話すことはできない、引き取ってくれ、そう言われた。福祉事務所を訪ねて生活保護のケースワーカーに問い質すと、サノさんは転院の日に病院敷地内で喫煙して注意を受け、「出て行く」と啖呵を切つて姿を消したが、夜になって病院に戻り、同日未明に呼吸困難に陥り息絶えたとのことだった。病院での死亡でもあり、サノさんの件について事を荒立てるつもりはないと遠回しに告げられた。親族からの連絡はないままに、死亡から二週間が過ぎた五月晴れの屋下がり、サノさんの亡骸は茶毘に付された。七十一年の生涯だった。

「鳩つていうのは、一度いになると添い遂げるんだそうですよ」二度目の生活保護申請へ向かう朝、足下に寄ってきた二羽の鳩を見てサノさんはそう言った。区役所前の公園のベンチで私た

ちは缶コーヒーを飲んでいた。「死ぬことを考えたりしますか？」

思いきつて尋ねてみた。

「寝る前に布団のなかでそんなことを考えますよ」

サノさんは、紙袋の中から煙草を一本取り出して火を点けた。

「おとうさんとおかあさんの顔をね。思い出すんですよ」

サノさんはけっして「おやじ」や「おふくろ」という言葉を使わなかった。いつもかならず「おとうさん」、「おかあさん」だった。とても大切そうにその言葉を口にした。葬儀の後、私はどうしても荒川の高い土手に上ってみたくなくなった。急な階段を上がると、広い河川敷のはるか向こうにブルーシートを屋根にした掘っ立て小屋が並んでいるのが見えた。その一つ一つの生活に思いを馳せながら、サノさんにさようならを言った。





TENOHASI 理事で 精神科医の 森川すいめい の本が 文庫化されました！

7月7日発売

朝日新聞出版・朝日文庫 648円

2013年に出版して大きな反響を呼んだ森川すいめいの本。単行本はすでに売り切れていましたが、この度増補して文庫化されました。

単行本を買いそびれた人は、値段も半分になって大変お得ですのでぜひお買い求めください。

著者からのメッセージ * twitter より引用

障がいをもつホームレス状態のひとの現実と、ひとを支援、援助するときの考え方。前作に約1万字、修正加筆して、文庫になりました。少しでも、偏見や誤解が減ればと願っています。

森川すいめい略歴

1973年、池袋生まれ。精神科医。鍼灸師。立教大学精神医学講座非常勤講師。2003年、ホームレス支援のNGO 団体「TENOHASI(てのはし)」を立ち上げ。東京・池袋で炊き出しや医療相談などを実施。08年、ホームレス状態の人の精神疾患有病率調査を日本で初めて行う。09年、認定NPO法人「世界の医療団」東京プロジェクト代表医師に就任。11年、同法人東日本大震災ニココロプロジェクト代表医師に。アジアアフリカを中心に、世界40か国以上を旅した。

<「統合失調症」>p192より

(心不全で生命の危機にあるにもかかわらず、統合失調症の妄想と幻覚の世界にいる早川さんは、かたくなに救急車に乗ることを拒んでいた。森川がシェルターを訪れたのは2日後だった)

「私は医者です。あなたは顔がむくんでいるし、脈も速い。心不全という状態にあると考えます。このままでは死にます。病院に行きましょう」

「そんなはずはない。向こうに行ってくれないか。私の部屋から出て行ってくれ」

「早川さん、ここは私たちの場所です。早川さんの場所ではありません」

「・・・オーナーは誰だ」「私です」「・・・」「ここで死なれては困ります」

「誰か一緒に行ってくれるのか」誰かが同行してくれるかどうかの確信が持てなかったからだとわかった。私は大きく目を見ながら頷いた。「私が行きます」「わかった、着替えたい」

早川さんは自分の調子が悪いことを知っていた。しかし、病院に行くことはより怖いことだと感じていた。病院に付き添うこと、自由を奪わないことを何回も確認した……



水曜日の夜回りに、 手作りパンを提供して 下さっている 池袋あさやけベーカリーの 山田和夫さんが 本を出しました！

8月6日発売
青志社 1300円+税

亡くなる二、三週間ほど前、すでに、家で寝たきりになっていた和子が、突然、僕にこんなことを言った。「お願い、パンを焼いてくれない？」

和子は生前、路上生活をしている人たちのために、パンを無料で配ることを始めていた。体調が悪くなり配ることができなくなっていたことが、気にかかっていたのだろう。僕は和子に言った。

「それは無理だよ、パンを焼くなんて……」 <妻が残したレシピ> p15より

その時、僕はホームレス状態にある人といってもあまりよくわからず、「てのはし」に興味を持つことはなかった。しかし、和子が亡くなったあと、進む方向を見失った僕に人とつながる橋を架けてくれたのはその「てのはし」だったのである。<パンでできる支援> p77

「パンを焼いて下さい。お手伝いしたい人がたくさんいるんです」電話の主は、「てのはし」のスタッフだった。(中略)

「こんにちは」玄関から明るい声が聞こえてきた。小柄な女性が5人の男性を引き連れて玄関の前で起っている。ガラス戸を開けて顔を出すと、こちらを向いてにっこり笑って会釈してくれた。その女性が中村さんだ。学生時代からホームレス支援の団体を立ち上げ活動をしている感じのいい女性だ。

こながりパン屋のスタッフが女性ばかりだったこともあり、手伝いに来る人は全員女性だと思い込んでいた。しかし、中村さんの後ろを見ると、大きな身体の男性や、華奢な男性が緊張した面持ちで起っている。「この人たち、パンを焼けるのかな？」ちょっと疑問に思ったが、「さあ、どんどん焼きましょう。教えていただかなければできませんから」中村さんは悪びれる様子もなく、くったくのない笑顔で僕を急かせる。手伝いに来た人たちは誰一人としてパンを焼いたことがない。「てのはし」や「世界の医療団」の支援を受けて生活を立て直した人だという…… <一本の電話が僕を救ってくれた> p158より

.....

この本の主人公は、実は和子さんですね。なんてすてきな人なんでしょう。この人の導きで、いまの「あさやけベーカリー」と「あさやけ子ども食堂」があることがよくわかりました。

知り合いが書いた本ですから、もちろん楽しみにしていましたが、正直、おつきあいで買ったのも事実。ところが、予想をはるかに超えて、文章が読みやすい！面白い！そして最後にまさかまさかの事態が。不覚にも泣きました。

はっぴいめーかー大募集

□ ボランティア

○ 炊き出し 毎月第2/第4土曜日

調理班（* 文京区のお寺集合） 11:00～17:00

* プライベートスペースですのでメールや電話でお問い合わせ下さい

公園班（東池袋中央公園集合） 16:20～19:30 ごろ

* 昨年4月から時間が変更になっています。ご注意下さい。

○ おにぎり配布と夜回り

* はじめて参加の方は、1週間前までに、お問い合わせフォームから申込んで下さい。

毎週水曜日（池袋駅前公園集合） 21:20～22:30

□ 活動資金

○ 郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人 TENOHASI

○ 銀行振込 ゆうちょ銀行 019(ゼロイチキュウ)支店 当座 259686 トクヒ) テノハシ

□ 物資カンパ 送り先は下記の「発送元」まで。宅配便は夜間指定をお願いします。

○ 衣類（これからは秋冬物を。スーツと女性ものは不要）・靴・毛布・カミソリなど

○ 食材（缶詰・レトルト食品など）

TENOHASI = 東京・池袋での生活困窮者支援活動

炊き出し：配食・医療相談・生活相談・鍼灸マッサージ・衣類（毎月第2第4土曜日）

ほっと友の会のお茶会（毎月第4土曜日）

夜回り：おにぎり配布・池袋駅と周辺の巡回と医療生活相談（毎週水曜日）

生活応援活動：相談活動・緊急宿泊・申請同行・住宅支援・医療支援・日中活動

その他、生活再建と地域生活定着支援全般

連携団体 世界の医療団・べてぶくろ（浦河べてるの家）・訪問看護センターkazoc

ホームレス資料センター・東京つくろいファンド ほか

特定非営利活動法人TENOHASI 会報第31号 2015/9/1発行

ホームページ <http://tenohasi.org/>メール TENOHASIのホームページの「お問い合わせ」から または tenohasi@yahoo.co.jp電話 090-1611-1970(事務局長 せい野賢司 平日は18時以降)

発送元 TENOHASI 事務局 090-1611-1970

